

## 本学における「増幅法による英語音声訓練授業」について

竹野 茂

### I はじめに

今日、国際的に通じる英語を話す人間が求められているにもかかわらず、日本の英語教育はそのような要望に応えてきたであろうか。

日本の英語教育は、欧米の語学教育理論の単なる焼き直しの上に成り立って来たきらいがある。そこには日本の文化的背景を無視した形で取り入れるという一面があったのではなかったか。何故、日本人の特質・文化背景を徹底的に分析し、日本人にもっとも必要な語学教育体系を作り、それを実践してこれなかったのか。

本学で行っている「英語音声訓練」はこのような日本の語学教育の状況を打ち破る一つの実践であると確信している。

この訓練は、異文化対応訓練教室である「未来塾」を主催している中津燎子先生が考え出されたものである。中津先生は今年度から本学で「英語音声訓練」という講座を担当され、月に1度本学学生を訓練している。月のうち3度は筆者が訓練を担当し、中津先生の訓練の強化に努めている。

筆者は大阪の「発音研究会（旧南大阪地区発音研究会）」の支部である「発音研究会広島支部」を1983年に数人の中学校・高校の英語教師で協力して発足し、およそ3年間中津先生の訓練を受けた。その後、1987年から1年間広島大学総合科学部でアシスタントティーチャーの一人として、現在宮崎公立大学教授荒木博之先生のもとで大学生を対象にした英語音声訓練を担当した。このときの訓練も中津先生が月1回担当され、残りの月3回は筆者ともう一人のアシスタントティーチャーとで訓練の補完にあたった。

日本の英語教育に欠けているものを補い、強化するものがこの訓練にはある。それは、音声を通じた異文化対応訓練である。ただの発音矯正訓練ではない、異文化対応を基本に据えた発音訓練なのである。現在、本学学生33名に「英語音声訓練」を行っている。4月に開講してまだ半年も経過していない状況で、効果がどこまであがったか不確かではあるが、受講生が英語の音声を異文化であると認識し始めていることはその感想（後述）から明らかである。

この小論では、本学で行っている「増幅音による英語音声訓練」とはどのようなものであるかを論じたいと思う。この訓練を受講している学生は、すべて教職希望者で、中学・高校の英語教師を目指している。彼らが本学を卒業し学校現場に就いたとき、日本の英語教育に光をもたらす力を身に着けていることを望むものである。

### II 英語音声訓練の目的

現在本学で使用している訓練のテキストは中津先生が「未来塾」で使用しているものに手を加えてものである。この訓練の目的について、このテキストから抜粋してみよう。

#### 訓練の目的

現在、英語学習において「話すこと」の重要性が言われていますが、「話す」以前の、英語音声をいかに身につけるか、という観点が欠けています。現行の音声訓練の多くはnative speakerの発音を唯一の規範とし、彼らの物まねをするというやり方です。もちろん、ある言語を学習する場合、それをある程度まねていく過程があることは否定できませんが、人間の音声訓練は、決してオウムの物まねとは同一には考えられません。音声訓練に

限らず、外国語を学ぶ目的は、その国との同一化を求めることではなく、主体的に外を見、自国や自分を考えることにあります。つまり言語（音声を含めて）の比較を通じて文化や風俗、ひいては思想、価値観、人間観の比較こそが外国語学習の最大の意義であり、究極の目標になります。この比較、検討する能力こそが「地球市民」としての第一条件であると考えます。このような点で音声習得を考えるなら、われわれ日本人にとっては母国語としての日本語音声の中で育ち、その特質を日常無意識に身につけ発声しています。したがってこの前提を踏まえた効果的な発音訓練がどうしても必要となってくるわけです。このような考え方にたって行われるのがこの訓練です。

この中にあるようにこの訓練の意義は、「自」と「他」を意識し、音声を含めた言語の比較を通して、外国の文化・思想のみならず自国の文化・思想まで考えることである。ネイティブ・スピーカーの単なる真似ではなく、異文化を意識した上でのコミュニケーションの手段としての自分自身の英語音声習得を目指すものである。このことは次にあげる「この音声訓練の特色」にも現れる。

### Ⅲ 英語音声訓練の特色・方法と留意点

この訓練の特色を同じく『英語音声訓練テキスト』より抜き出してみよう。

#### <この音声訓練の特色>

◎「原音」習得の訓練：「原音」とは英語の各文字が表わす基本音であり、いわば日本語における「あいうえお」です。アルファベット26文字の「原音」を作るための『口形』『呼吸』『舌の位置』『筋肉の緊張』などを知ります。何国人であっても、外国語習得時に、その母国語との葛藤のため独自の困難があります。したがって、日本語を母国語とする人には日本人のための独自の訓練を必要とします。

◎肉声による肉体訓練：音声は発音記号によって、視覚的に理解するだけでは不十分であり、あくまで訓練を受ける側の聴覚と発声器官によって作り出されるものです。決して頭のなかで作り上げるものではありません。つまり自己の体で音声を基礎から作り上げていく作業が要求されるわけです。更に音声に関して重大なことは、心理面、肉体面での様々な影響があるということです。そのため、時には呼吸や発声そのものに歪みや無理が生じ、将に心身そのものの訓練から始める必要が出てきます。

◎増幅法による訓練：日本人が英語原音を身につけるためには、増幅された発音の過程が必要になります。このことはスポーツにおけるフォーム作りを考えてもらえば分かりやすいと思われれます。つまり、訓練時にはオーバーとも言える程の動作を繰り返すことにより、体に覚えさせ、実際の競技においても、その基本を維持させる方法と似ています。要するに、100%の運用能力を得るため、200%の訓練を行うことになります。特に英語音声の場合、子音が日本語には見られないほど強く、また独立して発音されるため、われわれが発声に際し最も困難を感じることにあります。これに対する訓練は上記のような増幅法が効果的であると考えられます。

◎増幅音から原音へ：増幅法により口形、呼吸、舌、筋肉のコントロールができた後、原音をめざし、適切な音量、音質で英文を明瞭かつ自然に発声、朗読することを訓練します。

◎集団訓練：この音声訓練が単なる声帯模写ではない限り、各人が自己の音声を作り上げて行かねばならず、そのためには自分の発している音声を客観的に知る必要があります。つまり自分の音声は他人にどのように届き、他人の音声はどのように自分に届いているかを敏感にとらえねばなりません。これは自他を認識し、分析することでもあります。自分と共に訓練を受けている者の音声をも教材として役立てる態度が必要となってくるのです。そのことによって、聴覚そのものが鋭敏になり、音声を分析する能力が備わってくると確信します。

日英並行の発声訓練、英語音習得のためには、自分の日本語の発音を意識しなければなりません。また、母国語での言語表現に問題がある場合には、その点での改善も行わねばなりません。要するに、日本語においても十分に明瞭で語感の伴う発声ができなければ、英語音への移行は達成されません。

以上、訓練法に関し、概略を述べましたが、決して十分な説明ではありません。結局は、実際の訓練で体験的に知っていただくことを強く希望します。

主な留意点としては次の通りである。

この訓練の初期の段階では「増幅法」という方法を用いる。〈特色〉のところで述べられているとおり、「原音」の息の量・子音の強さなどを100%とすると200%の呼吸量・子音の強さなどを持った音を「増幅音」といい、その「増幅音」を使って訓練する方法を「増幅法」と命名してある。この「増幅音」は純粹に訓練音である。訓練が段階を経てくると、「増幅音」から「原音」そして「普通音」（日常会話に使用する音声）への切り替えが行われる性格の音である。初級者は「増幅音」＝「ターゲットの英語音」と誤ってしまいがちなので注意を要する。

「原音」とはアルファベット一字一字が持っている音のことを言う。音声訓練はこの「原音」を作る方法をわかりやすく説明しながら行う。唇や舌の動かし方を、その人の癖を見た上でアドバイスし、各自に繰り返し練習してもらう。トレーナーが出すモデル音は「増幅音」で、トレーニー（受講生）の練習音も「増幅音」である。

「増幅音」を作り出すには呼吸法がなんといっても不可欠である。訓練では日常日本語を話すときとは比べものにならないくらいの呼吸量を必要とするので、意識して腹式呼吸で行わなければならない。この腹式呼吸は、演劇や声楽の経験があるもの以外はあまり訓練されたことがないために、呼吸法をマスターするのに3カ月から6カ月を要する。

現在本学で「英語音声訓練」を受講している学生は前述の通り33名である。週1回90分の訓練時間で行える上限である。鏡とテープレコーダは必需品である。発音をするときの唇の動きを認識するために鏡を使い、テープレコーダは訓練をそっくりそのまま録音して他人の音と自分の音を比較し、訓練するために使用する。音を聞き比べるということにもこの訓練では重点が置かれる。先ず音の違いを聴覚で認識することが発音への早道である。違いを分析し、自らが調音点・呼吸法・唇の緊張度・舌の位置などを発見していくのである。人から教えられるだけでなく、自らが気づくということにもこの訓練では重点が置かれる。「自・他」の区別を明確にし、トレーニーが「自立」し「自律」する過程で不可欠の訓練である。このことは後に述べる。

#### IV 英語音声訓練のカリキュラムと日本語の訓練

##### (1) 英語音声訓練のカリキュラム

###### 〔第一段階〕

アルファベット26文字を一文字一文字「増幅音」で訓練する。これによって英語のほとんどの子音をマスターすることになる。唇（口輪筋）の強化、舌の強化、発声、息にのった声を出すこと、呼吸法などをマスターする目的で行われる。また英語の持つリズムを習得する訓練もかねている。

###### 〔第二段階〕

「アルファベットの5音連結」にはいる。一息で「ABCDE」などのまとまりを発音する。この方法によって、第一段階でマスターした口形をスムーズにつなぎ合わせること（口形移動）をマスターする。この段階から「増幅音」から「原音」への移行が始まる。

###### 〔第三段階〕

単語とりわけカタカナ英語として日本語に入り込んでいるものを取り上げ、カタカナ英語音からの脱却を図る。また音の連結、口形の移動、リズム作り、呼吸のコントロールも同時進行で行われる。この段階の仕上げとして単語の4音連結を行う。

###### 〔第四段階〕 音声表現（Ⅰ）

短い詩を題材にして、自分を他にアピールする目的で音声表現する。これまでの段階の音作りの基礎を前提として行われるもので、音と息の規定量を満たしていることが要求される。また詩の内容を解釈し、それにとりまわったリズム作りと一つ一つの語の持つ語感を音声で表現することを目的とする。

###### 〔第五段階〕 音声表現（Ⅱ）

スピーチの段階である。題材として、チャップリンの映画「独裁者(The Great Dictator)」の最後のスピーチとマーティン・ルーサー・キングのワシントン大行進の時のスピーチ“I have a dream”を取り上げる。スピーチは、ある主張の上になり立っており、説得、駆け引き、攻撃、情緒などが織り込まれる。その主張を織り込む練習としてこれらのスピーチを取り上げる。これらは非常によく知られたものであり、使用されている語彙も、

文構成も明快で単純であり、練習時に自分の個性による解釈、表現がたやすいという理由で選ばれた。語感やストレスは人の真似ではなくすべて自分の判断で作る。その際無意識のうちに自分の中の日本語感覚で抑揚を作るので、ここまでの段階の訓練に立ち返り、音を作りつないでいく段階である。

#### 〔第六段階〕 音声表現 (Ⅲ)

Free Readingの段階である。与えられた素材ではなく訓練生自らが選んだ文章を朗読発表する。自らのスピーチでもよい。自分の声の質量、癖、傾向などを徹底的に分析した結果、自分にあった題材・素材を選ぶ必要がある。それ故に、この選択も訓練である。自分の読みたいものがすなわち表現できるものでは決してないことを知る必要がある。

訓練のルールは、後段の参考資料を参考していただきたい。

#### (2) 日本語の訓練

この訓練がただ単に英語の発音訓練でないことは、訓練の中で日本語の訓練も行われるところからも分かる。時に応じてゲーム「20の扉」などによる発想訓練が音声訓練と並行して行われる。これは論理的思考の訓練である。他人が話した内容から情報を聞き取り、論理的に展開していくには最も単純で、入門期における訓練には適している。「中間日本語」を構築する上での基礎段階の訓練である。「中間日本語」とは、中津先生が東大文学部の言語学の教授であった国広哲弥氏に相談して命名されたもので、論理的な英語に移行可能な日本語のことである。この「中間日本語」については、宮崎公立大学荒木博之教授の著書『日本語が見えると英語も見える』に記述があるので、詳しくはそちらにゆずりたい。英語でもこのようなゲームを使って、思考訓練を発展させていく。この段階を経てはじめて英語によるディベートに移行できる。文部省のいうところの「オーラルコミュニケーションC」の段階である。

しかし、このオーラルコミュニケーションCには重大な落とし穴がある。日本語教育における発想訓練及び音声訓練の欠如である。つまり「中間日本語」の訓練のないまま英語でディベートを導入しようとしている突飛さである。欧米では、確かにディベート教育がなされているが、学校教育の早い段階から、また日常生活の中でも発想訓練も音声訓練も行われていて、その基礎の上にスピーチ教育やディベート教育があるのである。日本ではどうか。日本では「なぜ？」は許されないのである。「日本語」つまり日本の学校教育では「国語」と呼ばれている教科であるが、この「国語」の授業の中で、生徒が自分の意志を持ち、自らが抱いた疑問に対し適切に質問をし、納得のいくまで論理的に問いを繰り返したり、また論理的に自分自身の考えを公の場で意見表明をするといったことが訓練されてきたであろうか。確かに、高等学校「国語科」においても「国語表現」という科目はあるが、果たして機能しているかは疑問がある。日本語の音声訓練も発想訓練すらもないのである。そのような土台の上で、英語でのみがんばったところでディベート教育が定着するとは思えない。ここで筆者はディベートを否定しているわけではない。論理的思考を養う上では効果的手段だと思っている。その効果的論理思考訓練を行うためには日本語の基礎があると訴えたいのである。1994年10月5日付朝日新聞の「論壇」に福岡民放クラブ理事の田上梯三氏が投稿している記事が目にとまった。それによると数年前から小中学校の教科書に音読の練習・朗読などといったカリキュラムが登場したが、現場で教える意欲ある国語教師の間から戸惑いの声が聞かれるというのである。「どう教えてよいか困っている。読みを習っていないから分からない」のだそうだ。現状が現状だからと嘆いていても始まらない。田上氏が提言しているように大学や短大で日本語の音声訓練をもっと積極的に危機感を持って行うべきなのである。筆者は英語の音声訓練を行っている立場からも、日本語の音声訓練の必要性を強く感じる。

### V 英語音声訓練の実践における困難点

#### (1) トレーナーの立場から

(ア)「トレーナーのコメントが理解できない」

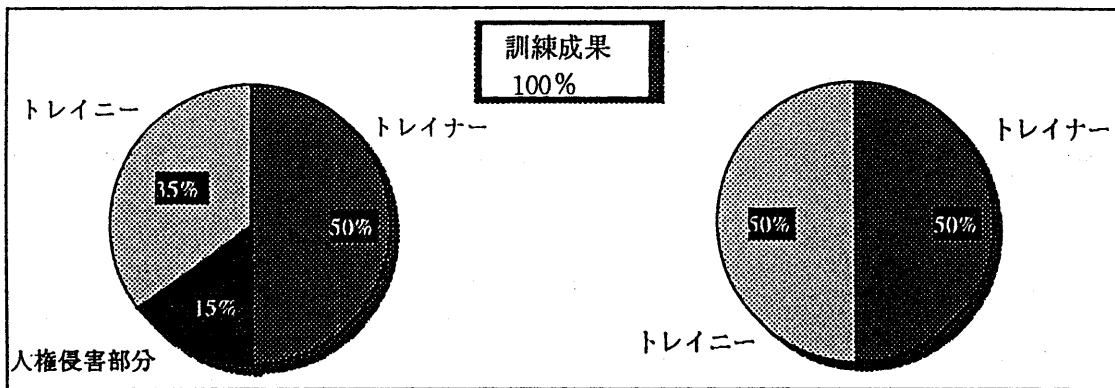
(イ)「授業以外の時間の自分での訓練がなかなか継続できない」「授業だけでよいとは思わないが、練習をしないで授業に臨むことが多い」

(ウ)「緊張しすぎてうまくいかない」

(ア)では、トレーナーの責任もあり、コメントのだし方を反省しなければならないが、(イ)ではトレーニーの甘えが全面に出てきているのではないか。これまでの教育制度の中ですべてを与えられてきた結果、自らが行動し、訓練の中から自分のものを掴みとることができなくなっているのではないか。この訓練では、そのような「甘え」は一切排除される。「甘え」に打ち勝つことが訓練の目的でもあるからだ。(ウ)については、自己分析不足である。自己を厳しく分析し、自己の置かれている状況を客観的に判断し、状況に対処する態度が要求される訓練であるので、自己をコントロールする能力も要求されるのである。筆者も訓練を経験したときに、どうメンタルバリアを取り除くかということに腐心したので、トレーニーの気持ちも分かるが、その壁を破るのはトレーニーの責任部分であって、それもまた大きな訓練目標なのである。

(2) トレーナーの立場から

(ア) 中津先生以外の日本人が、トレーナーを努める場合の困難点を指摘しておきたい。未来塾訓練心得(参考資料2参照)の中に、「未来塾方式の訓練とは、訓練する側と訓練される側がそれぞれ50%ずつの責任を分担し、努力を重ねて訓練成果を100%とします。訓練する側は、決して自分の分担の50%より以上の持ち出しをして訓練される側が自分でやらねばならぬ部分を助力してはならない。それは対等の位置を壊し、相手の自ら学ぶ権利を侵すこととなります。(図1参照)」という項目がある。これは実践することが非常に難しい。そこには日本人であるトレーニーの思考の罫が潜んでいる。つい面倒見のいい「日本人」が顔を出すのである。手取り足取り、「こうやったらいいのではないか」とトレーニーが自ら努力して考え出さなければならないことを教えすぎてしまうのである。コメントを出している際に気がつけばまだよいが、トレーニーの50%の責任部分を侵したことに全く気づかないでいることがこわいのである。これを克服することがトレーナーの50%の責任を果たすことであり、自らの訓練である。克服できなければ、(1)で述べた「甘え」を助長させる結果となり、訓練の大切な部分が欠落するという事に繋がるのである。



(中津燎子著, 「未来塾って、何?」より)

図1

(イ)(1)の(ア)に関連するが、コメントの仕方を常に磨く必要がある。常に的確なコメントができていくかということを見直し反省する必要がある。トレーナーもテープを聞き返しチェックする必要があるということである。そういう意味ではトレーナーもまた新たな訓練段階であるといつてよい。

(ウ) トレーニーの数の問題である。現在は前にも述べたように33名のトレーニーを訓練しているわけであるが、それだけの人数のトレーニーを90分という限られた時間の中で、いかに効率のよい緊張感のある訓練をするかという問題が出てくる。やはり理想をいえば20人程度が適当であるといわざるを得ない。しかし、この訓練は1学年200人の学生全員に受けて欲しいという相反する思いもある。ゆくゆくはトレーナーとしての資質を備えた人物が増え、宮崎公立大学のすべての学生が「英語音声訓練」を受ける体制ができればよいと望んでいるのである。そうなることが21世紀を支える若者にとって必要不可欠であると筆者は確信している。

(エ) 学生たちは指摘されるまで気がつかないが、第一段階から第二段階、第三段階と段階を追う毎に前の段階にやったことなどすっかり忘れ去ってしまうのである。時間の関係もあり必ずしもトレーニーすべてが完璧になった段階で次のステップに進むということではできないので、当然といえば当然のことであろうが、音を作るこ

とに汲々としているために、何故今この訓練をしているのかということに立ち返る余裕もなく訓練を受けているからであろうか。

## VI 英語音声訓練の経過

本学で「英語音声訓練」をはじめ、6カ月が経過した。現在は、訓練の段階では第五段階のスピーチ段階である。4月当初おっかなびっくりで音を出していた学生たちからすると、かなり音が変わってきている。先ず声が出るようになった。これは目立った変化である。現段階で目標の音声に近づいている学生も数名いる。

前期の総まとめとして筆記試験をして、この訓練の目的、何故訓練しなければならないかなど学生の理解度を見る限りにおいては、ほとんどの学生が理論的には理解しているように思える。

学生が書いた小論の中で、次のような意見があった。「(今まで) 英語を発音するのに呼吸を意識することなどしなかった。」「発声する場合に、自己の壁となっているものが何なのかを認識する必要がある。」「他の言語に触れながらそれを自国の文化や風俗との比較を体験しているのだ。だから英語を学習すると同時に日本語についてももっと深く関わる必要があると思う。」「(発音を) 注意されても感情的にならずに冷静に自分を見極める能力の発達面で大変有意義だと思われる。」「この授業を受けて、自分は外国人の真似しかしていない(と思った)。真似をしていても日本人なのだから日本人に会わせた訓練をしないと上達しないと言われハッと思いました。」「英語音声訓練を行うことによって、日本語音声を理解することができた。」

(カッコ内は筆者による)

これを読むと、受講生たちは訓練を通して、訓練を受ける意義として、自分自身の中の日本文化との関わりに気づき、自分自身を客観視するといった面にも目を向け始めているようである。

しかし、この訓練の最終段階で学生の英語音声がどこまで変わりうるのかは、学生自身が行う訓練総括・発表を待たなければならない。トレーナーとして結果に対する期待と共に不安も隠せない。筆者としてもこの訓練の真意を学生に伝え、良い結果が出せるように残りの数カ月出来得る限り努力していきたい。

## VII 今後の課題と展望

### (1) 音声訓練の必要性を再認識する意識改革

日本の英語教育では「読み書きはできるが、話せない」と言われて久しい。そこで文部省も「実用になる」英語、「コミュニケーションのための」英語を目指し、1989年(平成元年)学習指導要領を改訂し、高校外国語編・英語では、オーラルコミュニケーションA・B・Cを導入している。1994年度からオーラルコミュニケーションは、高校の教育現場で展開されている。しかし、現場の教師の抜本的な意識改革がなければ、この新指導要領の実働はあり得ない。(この意識改革とは、英語を音声言語として捉え英語音声そのものが文化的背景の中で成り立ってきたことを理解した上で、自らの発想をも変革していく作業である。)果たして、現場の教師の意識改革はできるのだろうか。筆者も高校の英語教師を12年間経験する中で、受験体制の中にいる一現場教師の手ではどうしようもない流れに押し流されてしまう現実を思い知らされてきた。

中津先生は、この数十年來、日本の英語教育の矛盾点を指摘し続けてきた。「そもそも、日本では何のために英語をやるのだろうか」と言う疑問が、中津先生の出発点なのである。先生の日本の英語教育に対する問題提起を要約すると次のようになる。日本の英語教育というのは非常に強固にできあがった能力検定制度であり、普通の意味の言語教育ではない。どんな種類の言語教育でも、最も重要なのは基礎部分である。その基礎部分の95%が日本の英語教育からは抜け落ちている。その部分を補う方法を教育に取り入れるべきだ。当たり前の英語教育をして欲しい。これが中津先生の主張だと考える。

日本人は、英語(ここでは、英語に限って論じたいと思う)が何故下手だといわれるのか。中津先生の言う「基礎部分(発声・発語・日英語文化背景・読解力の質・速度、表現するための意思伝達・主張・説得・交渉などを文章・音声ともに訓練することなど)」が大幅に欠落しているからではないのか。

英語を教える際、受験に縛られ、文法中心、書き言葉中心で教える。学習者はただの記号の組合せとしか受け取らないのではないのか。子供が言語を学ぶ際、最初にその言葉が話されている文化背景の中で言語を聞き、意識

しようとすまいとその文化を背負って発話することから始めるはずである。しかし、日本では、この「文化を持った言語音声」に対して、ほとんど関心を払っていないのである。この「音声」とは、ただの「英語らしい発音」のことを言っているのではない。将に学習者の「母国語（文化）」と「英語（文化）」との異文化衝突の中で、学習者自身がうまく negotiate して獲得する「音声」のことである。この「英語音声訓練」はこの異文化対応を英語の音声を使って行おうというものなのだ。そういう意味においてこの「訓練」は異文化対応訓練といえるのである。

英語教育の中でも理論的には、「これこれの意味を伝えるには、イントネーションを揚げなさい」とか「単語の品詞によってストレスの位置が変わりますよ」などと教えるが、リスニングの練習が十分とは言えないし、ましてや生徒一人一人が声に出して練習し、それに対しての細かくコメントを加えることなど行われることもない。あったとしても個々の単語に対してくらいのものではないか。

こう言うと、現場の教師にも不満はあろう。つまり、「1クラスの人数が多く、そんな個別指導などできない。」と言うものである。それは然りである。教科書の編成からして、現行の学校教育制度の中でそのような指導をする時間的余裕などない。

そもそも語学学習において、理論のみでは上達は望めないことは火を見るよりも明らかなことである。どのような外国語でも身につけるためには先ず体験ありきである。実際に異文化としての英語音声を意識し自らの肉体を使って声に出し、ぶち当たり、その衝突をうまく対処していく中で英語の言語としての「基礎部分」を把握していく。この把握がどの程度かによって、国際社会の中で通用する英語が話せるかどうかが決まる。

教員を目指す学生たちが、実際に教職に就き、教員の意識改革の先鋒となって、日本の将来の英語教育を支える人物になって欲しい。そのためには、その訓練は欠かすことができないであろう。訓練を受講した学生からは、「今まで受けてきた高校の英語にはない発見がある。」「ユニークな授業で受講してよかった。」「私にとっては意義のある訓練である。」などのよい反応を得ており、受講生全員が意義深い訓練であると考えている。今後の訓練成果に期待したいところである。

この訓練の中で気づかされることは、英語音（文化）だけではない。実は、日頃話しているはずの母語（日本語）音（文化）についても気づかされるのである。筆者も自分自身の訓練中に自らの母国語である日本語を意識せざるを得なかったのである。連綿と英語教育に対する疑問を呈してきたが、「言語音声を重視していないのは、なにも英語教育に限ったことではない。日本の家庭教育・学校教育の中で、日本語の音声訓練はほとんど無視されてきているのである」ということに気づかされた。

この訓練を通して学生たちは内なる日本人・日本文化と向き合うことになる。この訓練を受講するにあたって彼らの考えも及ばなかったことではないだろうか。筆者自身中津先生から訓練を受けて、思い知ったことである。筆者が高校の教師として自分自身の英語音に疑問を感じていたときに中津先生に出会って早10余年。中津先生に出会う度に新しい発見がある。中津先生は「私は日本人の顔をしているけれど、日本人にとっては異文化なのよ。」とおっしゃる。先生の人生そのものが語らせている言葉ではないのか。先生の日本人に対する鋭い観察力は今も衰えることなく、いつまでも新鮮である。そのことは学生たちも感じているのではないだろうか。

英語教育に携わる者は、英語を音声言語として捉え英語音声そのものが文化的背景の中で成り立ってきたことを理解した上で、自らの発想をも変革していく意識改革を避けては通れない。日本人が英語の音声訓練をしていくうえでの課題の一つは、敏感に内なる日本人・日本文化に向き合い続けながら実践を重ねていくことであろう。

## （2）中間日本語を形成する日本語教育の充実

発信型の思考を培うためには、日本語教育とりわけ発想訓練と音声訓練の必要性を中津先生は唱えられる。

言語習得の上で特に大切なのは「母語」である。日本人について言えば、日本語である。

先に述べたのでここでは繰り返さないが、言語「音声」を重視していないのは、なにも英語教育に限ったことではない。日本語、すなわち国語教育においても音声訓練の必要性は、意識改革とともに、再認識されねばならない。そして、論理の構築力を養い、自分を表現できる国語力を身につける国語教育と英語教育との連携が課題となる。

### (3) 学生の発信型の思考の育成

筆者も10数年に亘って高校での英語教育に携わって来て感じることであるが、生徒は大多数が受け身の態度で授業を受けているように思える。このことは英語教育だけの問題ではないように思える。生徒を積極的な態度で授業に参加させられなかったのは、筆者の力量不足かもしれない。「私の場合はそんなことはない。生徒は積極的に授業を受けていて、意見表明もする。」とおっしゃる先生方も多数いらっしゃると思うが、すべての教科にわたってすべての教師がそう言い切れるであろうか。日本中のすべての教師が、あらゆる場面において学生・生徒に疑問・意見を自由に表明させていると言えなければならないと思う。そうしなければ、「もの言わぬ（自分自身の意見を発表できない）生徒・学生」を創り出しているとしか言えない。筆者も含めて日本中の教育関係者が責任を持って、このような現状を変えていかなければならないときが来ている。

筆者は、本紀要の別稿で、LL自習室の利用法について論じたが、そこでも世界ではコンピューターによる情報通信の利用が当然のこととなっていて、受け身的な学習では、社会に対応できないことを述べた。英語音声訓練の教育も学生の主体性を養い、自他の比較・検討を行う能力を身につけることをその目的の一つとして、常に意識・点検し、その方法を改善し続ける姿勢で行われなくてはならない。21世紀を目前に控え、若者がどのような社会を望み、どうその社会を作っていくかをこの訓練から導き出してくれたらと筆者は切に願うものである。

国際社会を意識したとき、「自らの意見を表明できない」ということほど大きなハンディキャップはない。

### (4) 訓練過程の一段階としてのトレーナーの位置づけ

最後に、トレーナーの位置づけについて述べておこう。トレーナーはトレイニーに対して一段高いところにたった存在ではあり得ない。筆者はトレーナーもまたトレイニー同様訓練を行いながらも訓練生であるという認識を持つべきであろうと考えている。そうしなければ、トレーナーとトレイニーの50%対50%の責任分担理論は成り立たなくなる。トレーナーとトレイニーは対等の位置に立つべきであり、訓練しながらも逆に訓練されているのである。従って、トレーナーはこの「英語音声訓練」においては訓練過程の一段階として位置づけるべきなのである。大学の教員である筆者に「教える」とは「指示する」ことであるとするとする部分が染み着いていて、コメントと称してつい「指導」をしてしまうことがある。コメントは「提案」に留めねばならない。日本文化にどっぷりと浸った日本人トレーナーであればあるほど容易なことではないが、このことは常に肝に銘じておく必要があると筆者は考える。これはトレーナーである筆者自身への戒めでもある。人権侵害をせず、自と他を区別し、対等のコミュニケーションを目指すのが、国際社会におけるコミュニケーションというものであろう。



## 参考資料1

以下は、訓練のルールについてのテキストからの抜粋である。

### ◆訓練のルール（要保存）訓練期間中は繰り返し熟読すること

#### 1. 開講当日からの必携物

- ① 鏡（縦20センチ×横15センチ程度 卓上型）
- ② テープレコーダー（電池式）
- ③ テープ（90分×2）
- ④ ノートと筆記用具

#### 2. 訓練の形態

- ・時間：1コマ、90分
- ・最初の30分は、クラス全員にそれまでの簡単な復習をする。次の60分は、その日に進めるべき予定の新しい音を「講義」する。

#### 3. 「音」についての「講義」とは？

##### 1) 何をやるか（WHAT）：

例；Aの音は口を縦に開く。唇の両端を広げない。そのまま息を吸い込み吐くときに声を出す、云々。

##### 2) 何故やるのか（WHY）：

例；口の縦開きは、呼吸と音を逃がさないため。

息を吐くのと声を出すのは、息に声をのせ、よく響き、声が通るようにするため。

「何故それをやるのか？」をはっきりさせる。云々。

#### 4. 「音」についての「訓練」とは？

##### 3) どうやるのか（HOW）：

例；受講生当事者にとって、その時点で最もわかりやすく、必要なテクニックを見つけて、練習させる。また、本人が納得できるまでやらせる。

#### 5. 「音出し」と「コメント」について

1) 訓練では受講生たちは円形またはコの字型に座り、トレーナーは片方の端に立って、一人ずつ順番に音を出させる。これを「音出し」という。

2) トレーナーはその音を聴き、口形を見、呼吸量、唇のしまり具合、舌の位置などをはかりながら、本人にとってよりよいやり方を注意・提案する。これを「コメント」と言う。ただし、「コメント」は絶対に評価ではない。訓練未完の時点で評価はありえない。

3) 受講生は「コメント」を参考にしながら、鏡の中の自分の口形を見つめ、自分の呼吸と声の状況をはかりながら音をつくる。

#### 6. コメントと受講生

1) グループの各人に1回ずつ音出しをして、順番に回していく時、1わり回すごとに2人か3人、多いときは4人に対してコメントを出す。それ以上は次回にまわすシステムである。

2) 従って、自分は何も言われなかったからといって、問題がないのではなく、次回にまわされたと承知しておくこと。

3) 音出しを順番に回して、クラス全員の耳を自・他の「音」とそれについてのコメントに慣れさせることが目的なので、決して聞き逃さない。または聞き流さない。数回まわす中に全員が良否にかかわらず、原則として何らかのコメントを受ける。

4) クラスの中でも、個人の実際の練習時間量、分析力、または理解度によって出される「音」にかなりのムラがあるので、毎回、同一の人間が同一の音を出し、同一のコメントを受けるとは限らない。

5) 自分の音について何もコメントがない時は、音を出した時点で「可でも不可でもない」、または「まあまあ程度」であると理解すること。決して「良」ではないが、それまでのレッスンの結果として、「否」ではない、ということである。

6) コメントは原則として、音出し時の本人の実態に則して出されるので、本人もまた、客観的に自分の音、

自分の実態を把握することに努める。自分が思う自分の実態とは異なっているとしても、冷静にその差を比較分析する。

7) 訓練の進行

訓練中のコメントをもとに、練習を毎日10～20分・1日2回・週6日間続けること。その成果を次の訓練で見せる。訓練前半では、各々の方の成果を聞いて検討し、コメントするが、その出来不出来にかかわらず、後半は次のステップに進む。従って、欠席した場合は他のトレーニーの方にテープを借りるなどして、訓練の進行に追い付くようにすること。

8) コメント

練習成果を発表したときにトレーナーがコメントするが、このコメントを情実抜きに分析し、次のステップの参考にする。また、コメントを人格批判と取り違えないように注意。

9) 推察厳禁

トレーナーのコメントでわからない部分は、自分で推察したり、そのままにしたりせず、必ず聞き返してコメントの内容を確認すること。

10) つもり幻想厳禁

この発音・発声訓練は肉体訓練です。口形の作り方、舌のまき方、息の吸い込み方・止め方など、実際に自分で実行してみなければ訓練の意味がない。やったつもり、音を出したつもり、という「つもり幻想」は訓練の場では厳禁である。

11) コメントと情報収集

訓練中のすべての言語活動は自他にかかわらず貴重な情報源として収集し、整理し、役立てる。

12) 増幅法

1年間の訓練の前半部分では、口の開き方、声の出し方など、やや大げさと思えるほど、その動作を繰り返すことにより、英語音を体に覚えさせる事。つまり、100%の運用能力を得るため、200%の音を作る訓練を行うということで、このような訓練方法を「増幅法」と呼ぶ。そして後半部分では、徐々に音を削り、適切な音量・音質で英文を明瞭に発音することを訓練する。「増幅法」で作られた「増幅音」を正しい音と思い違いをしない。

13) 耳の訓練

音を出すと同時に、音を「聞き分ける」能力開発が始まっている。発音訓練では、この耳の訓練が重要である。しかし、はじめから自他の音を聞き分けることはできない。根気よく聞くことに集中していくうちに2ヵ月～4ヵ月後にはクラスメイトの音を聞き分けることができるようになってくる。

14) 聞き分け

前項でも述べたが、この訓練では聞き分け能力を養うことが必要不可欠である。毎日何十分か訓練時のテープを聞き返すときには、イヤフォンを使って聞くことに集中し、自分とクラスメイト、トレーナーの声の違いを聞き分けることに努めること。これによってコメントの分析もやりやすくなってくる。

15) 熱中厳禁

1年間を通じて、自他の音の分析を続けること。浅薄な熱中はやめて、真剣に練習に取り組むこと。

16) 無断欠席ならびに無断中退厳禁。欠席時のレッスンはテープ学習で追い付くこと。

17) 4回以上のレッスン欠席は、その訓練成果については責任を持ってない。

18) テープは必ず聞き返し、自分の音声を確認すること。

## 参考資料 2

### 未来塾訓練心得

- 1 この訓練は異文化理解のための発音訓練が主軸になっています。発音技術の習得のみに集中したり、又は抽象的な文化論議にのみ傾斜すると、結果として、文化の何であるかもつかめず、音声もつくりえないので、必ず自分の体と頭を実際に動かして訓練すること。
- 2 人間の言語音声は心と体で作ります。どちらが欠けても人間の言語にはなりません。外国語の場合、音声を耳で聞き取ることと、その音を自分で作ることとの間に大きな開きがありますが、それを意志の力と肉体作業で埋めていくのが実際の訓練です。従って訓練生は自分の健康管理と体調の維持に厳しく留意して下さい。
- 3 未来塾方式とは、訓練する側とされる側がそれぞれ50%ずつの責任を分担し、努力を重ねて訓練成果を100%とします。訓練する側は、決して自分の分担を50%より以上の持ち出しをして訓練される側が自分でやらねばならぬ部分を助力してはならない。それは対等の位置を壊し、相手の自ら学ぶ権利を侵すことになります。
- 4 訓練は必ず15人以上のグループで行います。グループ全員の一人一人が訓練者(トレーナー)の発するコメントを参考にして音を作ります。お互いの体調、呼吸量、発声の癖や特色を絶えず観察し自分と比較、分析します。自分一人だけの音声にのめり込み、他の音声や、トレーナーのコメントの分析を怠ると訓練の成果はほとんどゼロになります。
- 5 訓練中、音声(自他を含む)を聞き取るとき、  
(1) 自分の耳を通して聞く自分の音声 (2) 他(トレーナーとグループメンバー)が聞く自分の音声  
(3) 自分の耳を通して聞く他の音声 (4) テープから聞く自他の音声  
以上四点を比較し、分析する習慣を速やかに作ること。
- 6 比較と分析の根本的な心構えは、常に自分自身をよく観察し、分析できていること。自分を客観的に検討できていなければ他との比較も分析もできません。自分の顔面の筋肉の動き、呼吸量、肩の緊張の度合い、唇の歪み、舌の厚さ、固さ、柔らかさ、声量、音の高低などを、常に観察し把握しておくこと。
- 7 訓練中は、他の意見を聞いて参考にし、それに頼らない。必ず自らが最後の案を作り、実行する。そして自分が自分の条件を作り、自分をコントロールすること。自立と自律を学んで下さい。
- 8 毎回のレッスンには必ずテープをとります。やむ終えぬ欠席の時には誰かに頼んでテープを聞かせてもらって下さい。ただし、正当な欠席と認められないときは、ことわられることもあり得ます。メンバー一人一人がテープの聞き返しに必死で時間繰りをしているとき、迷惑をかけないで下さい。
- 9 テープに限らずレッスン時も、また日常生活の中でも、自他のどのような音声をも単純な聞き流しをやらなないで下さい。第5項に述べてあるごとく、4通りの聞き分けに心がけて下さい。
- 10 さらに4通りの聞き分け方をこまかく分けて分析する習慣を一日も早く作って下さい。  
(1) 呼吸量 (2) 声と息が同時にしているか否か? (3) 母音、子音の規定量が出ているか否か?  
(4) 口形がスムーズに移行しているか否か?  
(5) 口形の移行と母音や子音の連結が同時にできているか否か?

(中津燎子著『未来塾って、何? 異文化チャレンジと発音』より抜粋。)

参考文献

- 1 中津燎子 (1986), 『英語音声訓練テキスト (増幅音による)』, 宮崎公立大学
- 2 中津燎子 (1986), 『未来塾って, 何? -異文化チャレンジと発音』, 朝日新聞社
- 3 中津燎子 (1978), 『何で英語やるの?』, 文芸春秋社
- 4 中津燎子 (1983), 『再び何で英語やるの?』, 文芸春秋社
- 5 中津燎子 (1975), 『呼吸と音とくちびるとーなんで英語やるの? 反響編ー』, 午夢館
- 6 中津燎子 (1984), 『母国考』, 情報センター出版局
- 7 中津燎子 (1989), 『風のシカゴ シェリダグ・ロード物語』, 情報センター出版局
- 8 中津燎子 (1982), 「未来にむけてのねがい」『学校英語にいま何が 強まる差別・選別教育の中で』(大浦暁生・阿原成光編), 三友社出版
- 9 中津燎子 (1982), 「学校は英語を教えない」『翻訳の世界 1月号』, 日本翻訳家養成センター
- 10 竹内敏晴 (1975), 『劇へーからだのバイエル』, 青雲書房
- 11 近江誠 (1984), 『オーラル・インタープリテーション入門』, 大修館書店
- 12 荒木博之 (1994), 『日本が見えると英語も見える 新英語教育論』, 中央公論社
- 13 荒木博之 (1986), 『日本人の英語感覚』, PHP
- 14 荒木博之 (1985), 『やまとことばの人類学 日本語から日本人を考える』, 朝日新聞社
- 15 松本道弘 (1982), 『「ディベート」入門』, 中経出版
- 16 直塚玲子 (1980), 『欧米人が沈黙するときー異文化間のコミュニケーションー』大修館書店
- 17 鈴木孝夫 (1975), 『閉ざされた言語・日本語の世界』, 新潮社
- 18 鈴木孝夫 (1985), 『武器としてのことばー茶の間の国際情報学ー』, 新潮社
- 19 青木昭六・田中正道編 (1985), 『伝達重視の英語教育ーノーショナル・シラバスと英語指導ー』, 大修館書店
- 20 堀口俊一 (編著者代表) (1991), 『現代英語教育の理論と実践』, 聖文社
- 21 文部省 (1989), 『高等学校指導要領解説 外国語編英語編』
- 22 文部省 (1992), 『高等学校外国語指導資料 英語を聞くこと及び話すことの指導』
- 23 文部省 (1992), 『中学校指導書外国語編』
- 24 文部省 (1991), 『中学校外国語指導資料 英語を聞くことの指導』
- 25 文部省 (1993), 『中学校外国語指導資料 コミュニケーションを目指した英語の指導と評価』